

日本社会薬学会東海支部第 12 回例会報告

東海支部・飯田耕太郎（名城大学薬学部）

「環境問題と薬剤師の役割について」の講演会開催

平成 20 年 3 月 20 日(木)名城大学薬学部 6 号館情報メディア教室において、今、社会的に問題になっている「環境汚染」をテーマとして日本社会薬学会東海支部が主催し、市民・薬剤師・薬学生を対象にして、環境問題、特に大気や水など環境汚染問題について奥井登美子氏（土浦薬剤師会）から町の科学者としての薬剤師の立場から講演会を開催しました。

「土浦の自然を守る会」の奥井登美子会長は、琵琶湖に次ぐ大きさを持つ霞ヶ浦の水質浄化の市民運動を 40 年にわたり牽引した女性薬剤師で、今なお地域の水質浄化運動に取り組んでいます。1980 年には「土浦の自然を守る会」が中心となって外資系企業の半導体工場廃水の指し止めを求めました。半導体工場の廃水には、ヒ素、アンチモン、フッ化水素酸など多くの有毒物質が含まれることを薬学で習得した衛生化学の知識を活用して独学で調べ上げ、工場廃水の危険性を訴える要望書を企業に提出し有害廃水をクローズさせることができました。さらに霞ヶ浦へ流入する 56 河川全ての水質検査を地域の大学、自主講座の市民の協力で行い、「霞ヶ浦市民の手による水質調査」として 1983 年の第 1 回世界湖沼会議で発表しました。1995 年に奥井氏らが中心となって世界湖沼会議「霞ヶ浦」を開催し水質浄化に関する「霞ヶ浦宣言」が採択されました。1997 年には奥井氏が会長を務める「土浦の自然を守る会」による霞ヶ浦の水質浄化運動が高く評価され、環境庁の「水環境賞」を受賞しました。草の根運動から 40 年にわたり霞ヶ浦の水質浄化に取り組み、その運動を市民レベルにまで高めた奥井氏は、今もなお本業である地域薬局の社会的意義をひと時も忘れることなく環境問題に情熱を傾けています。地域の薬剤師が環境問題に取り組んだ実例を聞くことができ、参加した薬剤師・薬学部教員と活発な討議が行われ、環境問題と薬剤師の役割について考える有意義な例会となりました。

飯田耕太郎（名城大学薬学部）